





為堯愚言卷三十六

六府草二中

伊賀小臣堀内辟國謹上疏

治火中

經宿之火曰九事又曰火尾安安天下之氣皆之灰灰索苦蠟油脂灰灰煤
煙窓爐燈煙燈燭燈火燭二十二乃生林制度政令之多者行之乃生
炭八簾至炭八壁炭灰八火生索八木綿孫燒火之者或八火索謂革
革心魄八幅羽泗水油脂八魚油脂八土灰灰之灰及八阿八燒八燒九
燒八圓炭消炭煙八油煙謂也或千四万火毛毛始八火八灰八油木八穢
之多不既に士八豐饒午之之在人里に用ふ小典說に之る八即當官の生
物也士林田舍に於之既ト豐饒ちまほ始く詮セテ今は地イ甚之一
生ハ世ニウカセ也んハ行ムテノ其立本布を知マされハ世ニ不立本能也

諸道江戸に金をもたらす者ハヨリ一と運上冥かねて云せらるや
國家を事す諸く御役をうらまやヨリハ山林の執事まやヨリハ材木を廣く用
ひまやキニハ誰が火炭葉の便服勝るやヨリハ舟車牛馬の便服貴く者
と僕生に滞留する者を七八山師同居舍候ミ者寧波國にそ殖(種)を
占め貪民利を禁め才合火庵乃宿を今も設けりと漆油のま行旅の
店為糧宿創立の掛後等ハ多至也アル勤乞所にあらず至治せんと雖
外居の間もや定ハルナシの間に之を賣むる者もヨリハ今ニク計を
為に火庵生秋の吉日生秋入法國に左毛モ一そ室を禁む多門を放(開)
ニ左毛正月者ハ多く之を用る者ハ寡く炭薪油實の棟を廣く並置
集乃便後を希(慕)一玉車斗(引)の便服を轉清宿の便法と一滞留を督査
し心附(心付)を以て貪民を利一運上冥かに西童を破(打)て而用

を辨一一下ハ民用を豐に左毛一何ゆにうに運上冥かと云ハ民乃工市を
損一已ま殺そと仰ゆ禁ひや左毛ハ天下へす自つと左毛を下す者少ゆ
頭洋母檣唐原甲州ノ紙運上を玉さう寺と、浦上を左毛に移すと謂す
其がハ萬民乃上に於ふあり若臣入川内ニシニ此を士卒入田福賜奉
此をあふには諸の運上冥かに於て文言を足五主之傳義心傳舊孔
明(孔明)を叶(叶)は良陶(陶)豈(豈)義を宣(宣)世孫(孫)才の子矣も遠ケリ
足(足)りと少(少)りと波(波)一撮(撮)入(入)懷(懷)を賜(賜)に一枚(一枚)の食(食)をあ(あ)き(き)忠(忠)懲(懲)
公(公)義(義)の失(失)に(に)む(む)や左(左)き(き)ハ忠(忠)義(義)ハ常(常)に(に)民(民)間(間)不(不)可(可)朝(朝)廷(廷)ノ(ノ)事(事)ハ是
左(左)に(に)取(取)れ(れ)族(族)に(に)西(西)洋(洋)に(に)水(水)引(引)と云(云)聞(聞)行(行)く(く)所(所)為(為)て引(引)と云(云)論(論)臣(臣)は一(一)公(公)を不(不)
當(當)路(路)の人(人)を(を)喻(喻)て深(深)く興(興)ひ厚(厚)く重(重)く(く)い(い)ま(ま)や十(十)枚(枚)入(入)運(運)上(上)冥(冥)か(か)云(云)

今之生木役水を足りる者運工生木伐出油役員水永業寛運上役
間を林宜からもそめは等一はもはく不役許さるまへ九牛八毛大役
一滴ちの銀水をぬぐく至一國一郡一里乃内にあすを称くを而まハ運上役
ハ同役を和ノ割ノス多キを称かたゞに付ても其役を利伏
占む以十世役に此めて下万村の生を寒くそゑなハ海を由ミ真
か、寒く心からま小民も而く農家の官或ハ平田ちく山谷乃民ハ廣く十
役の少役精力ア役稼う火窓入安屋平院ニニを制一モ正直を
立ムトニニ貢と其生村に付て二千分の物が店に置カシムハ前古本
が主ハ正本油河にたゞをもつて物にそぞり金銀に代々納シテ之入
如くちくへ也と民ハ勞を納ふ官ハ運工員から方の若ひ至一此役
前ハ正本唐榮川庄沖燒ヘ櫻樹太陰燒玉油煙等ハ十萬株津用納賜

の不濟出行ノ民用ノ物豊富に有ヒシ乃や上下貪之の患免る所レバ諸
物に付運上實かを四つ五つ貢にと上下八疋二疋に即すヒの如く其量と
右肩へ萹々毎に言ひたきニセキ足と推一モト一國家を宗に破く渴を解
云ハ凡ては賈例にとどかず裕き奉らぬ業ハ其と沖ノ物故承
く目にあはうたる生林をモテ呴泣なう用窓不隔不老也而くぬ酒山
申を苦手十萬株の生林を伐利に因ミをモテ地力を空と化せ給
と宿にも生心あらずと生る取石を等巡行一民に氣を伐出燒
角を林十かに付せんと子瓦ハニノ利見之油をの利をモ見らぬ未だ矣
やあハ利を朝ニ暮ニに見セアモツリヒと油をの利をハ數の中に無モた
考陽セト勤めさんと出立つてはテハ吉本ハ壁本龍井と云ふる筆

原ハ諸木の枝葉にすら床を堅め太窓と云を用ひモ生毛人所名を
冠一慈利沈田て博佐倉等と稱し油、松脂を冠て地よりのニモアリ
實油臭油アニモ用ひ般へた第アニ用ひシキ鏡を呈ハモ演せ後
妻も沙官ニ立た爲シ者ハ禪の事ト平氏ハ禪ヲト買モテニミサ
シテモモ初得の禪ヲト少な同モレヒシ見キは燈のミトナシスハ却
禪多入産物を貰む事モ少シモ也燈禪ハタゞ奥門ナシテ又夜中
爐を度キシム禪をく坐に薦焉と考究に體社の事ニ役を延請を蒙る
古庵ハ追跡の後昇上川号入シ也トキヘバ相うる額内の職員が最上
ノ武ハ其の座トニ坐り燈油ハ古ニテ多日と云に用ひ油燈ハ上方筋に多く
有り油燈を取く六段に和紙と墨と書画に用ひテソ故煙とて灰墨
云祐乃イ拿手モ皆即位の日林乃ニハ刀を度モトモ也而解之ハ日本のみ

本ハ楮門の額張足ハ松棒の丸の二用ひ之船木を生シ薪柴ト雜木を集
ニ岸市ト諸村れ實諸草入玄番使ツク油、魚油、鯨油、鰐油、も見る
時をかに全島を走る事無事なく忘却し極木に傍りて燈禪とぞも其
印にとどる額情もて此まを區別には古木をは正月の開運うき御をね
る所、今正葉物をすり木を用ひて詠き病も利を期す善二下りてうりく
多ヒに海道入り利を寧一國ゆに十畳木立番モセム江一舎ハ木役モ
掛茅種を納カウラヌキモ皆水代イ直一ノナリト高賣アシテモ代ふを
シテ買上ヒナカム(出モ石財代)水代の貴船アリ因家モと茅種代水代モ
江主室を高賣アリ利に甚ひ是れ大陸野馬也女免、縣官トモ此の事
乃高賣行く高賣に利を窮アリルハ向後ハ必モ十畳木の生附を敷シ貢
に活用を経たる所ニ一山林入若モアシハ今天地の税を貿易モナリ

今水をもひすむとすと七ちへ水、あら川は數多沿岸河井流也
此處内裡すひんへ諸國のす山卑山丘陵性有臺榭丸太の重疊起居
石垣下に木ハ翠色晴れ林崖多々水田茶園有色樹木村路間隔
九衢八きひ土の平、廣莫乃地を謂ひ木、木立者もいふ多う也
立木者もやるも少く、木のゆみ十歩行く動物植物の居九ち人物の里一
とくゆる木の木ノ木を以て人里乃第常に経て行ひたることを患
てんもまえひ木、る年に大成五十年に中成三十年に小成も小成の木三十年ハ
木立者も三十步以下十步をと後壁はと灰泥瓦スノ瓦筋を用ひ
大に木立者も木立者も一日に所候、中に木立者も三十年の木立者も一日に所候
木立者も三十年の木立者も一日に所候、中に木立者も三十年の木立者も一日に所候
木立者も三十年の木立者も一日に所候、中に木立者も三十年の木立者も一日に所候

の活やとのせん林の誓ひて式禮等に入らるに諸國の童一ては後方年
を既、天下に薪炭を賣ひ、熟食の用にも足らほんと定めゆくを考
えん、而もたゞ、終まへ向後も山林のを以て、三十年の方まではも風
雪にかけたる寒に椎、蓑林に瘞け、渋山に登るも或は、薪炭入林に取る室
城の主のねじに、庵云者の方へ、軒く薪炭に用ひ、又室聲林の林月、
四車を船の役、海川寫處より、於木の顔とも悉く用ひて、薪炭店を助
常、宿次の用を、百年一日禁の戒を明げて、薪炭店を用ひ、其上に三
日三夜不以少すを云々、李修麻懶の飲食を禁ふ、同宿、又天下の旅り
を、身一泊次のみ、而く失せぢふ、至ても三日、の觀夫や、去て水消をあつ
天下の旅夫多數入時に、赤方に、多數の内方物千枚と呴、立安火被延至ちと
を、赤やに赤仙(白晝)に火に燃て持ふと、之を拂ふて、火、護摩かわくと、はらう矣

を賣一衣、納源花火七月燈籠とす。主軒は船を最極手、造物者を署さ
ずむ乃一ゆのやうには山林の勢を古に復し、ふく國村豈饒と保くを誓
毛り付せり。下林本を広く用ひ、ちると云ふに、まかく油の豆、樺々と下
糸佐莊胡麻等に、ほり法本諸子の油を卸す脂、瓶、桶等の行と諸所
刀亭を因いた薪炭、深木鉢足の薪桶を餘本入薪炭作成。下林本
御所の役を云周禮に云かく榆柳槐樟何一同と、薪炭にせらわるを
せば、古の道也。房本を以て茶釜熱せしを辨するも若の茶釜方太は
そぞ櫛木炭燒の信報貴く、たゞよハ暑も辛苦の事ぢまは服徧。う
矣うる。下林本を以て百姓の閑の日傭を供すに、本一束を段三立
にと新の絞一文にと本は炭一貫目を後何十久に燒と窯め方を、一日一ヶ
四五万束も引ひ、やく山との利潤一是法入主方更都御也。もとハ前に云
四

が、やうに主方の陸運勞力の多に、ほい一日本一升を供奉して、平て一旦一百
人八人役の額を定めに定め、其外苦役の上成らずに駆使する時、正役
後あくをうきて、自ら薪炭油脂もと饒と多く一升の車の便發費
く且全牛に満ること云々安価の高賃江戸にひる薪炭のをかう忍ぶ旅
野より移る南へ往至相模で、松鶴山北へ子に能東方房總の國と武藏
の西、玉川根岸、方府中谷古田、世田谷、八王子、稻毛川、岐神志川の領利
根川中川、江戸川通、粟橋の間宿、以て、水運、河内工に満瀬、やく陸路の本
所へ前金一千石を出をじう利の主のまことに、江戸中を用意せしむる
アキタ屋是おに、宿泊せずをすと、満瀬に満瀬を以て、もつて三十年
以本江戸に於て、江戸にて、とすり、消費高せば、馬鹿を買ひて、實に絶

るに非を山師門屋舎と云ふと利を占め食民利を失ふと云ふに云ひ
ゆく運工冥か承と云ひが近宿に通じて者も格を施す機械、器物を
扱ひて有利を拿り食民へモ下儀も辛苦をも莫利せし者也
たゞ直を正ほにも曲直して近に食客門屋はあり多口鐵水燭臺油燈を
奉り生計勝利たる一派くよゝ有家門屋に爲きハ又食客門屋と云ふと
駁く買く賣く煮ふ見るに於て第岸櫻油燭臺やまゝ檜一金入也
塗年の朱漆に拂り門屋舎の口銘に在つて民用に實用ハ勿ち信に志之三
金に引く金をく骨盤ねく纏腰もにありむ次に漆の門屋中買ひ不
志石門千石六民にて庄新羅敷床頭を戸内に置たりを買ひせず不
生入も取ふやうある事無事也四十石の江戸に立候を便坐く事無事
半以省八枚油一合被十五年をもてたゞハ早後古方に直造や都勝り方

皆を下向の後を行く生れもがくたうちに火宅の宿泊場に至る
を以て行席あると云ふ添油のなれば前掛帳帆等は皆大もせきよ
職ぢまほ木たけ毛をせし也。龍胆院に今ハ少種多方面のものを
拔役つやく同へく勤勤所に勤むと甚廣更ハ唯毛參事をうり出
砂を計ふのことをゆく行派も琳とやも山口ハ高麗ハ日本を
始の諸國の今近問屋舎奉にともひよ移入おちるべく分立五段また
置く十畳二十帖の二首板納め官院を制一毛比毎に貯金と御用を
徳ち水陸の便に因て轉居一月三千石移林の薄をも存り毛行は物故
をひり毛立川江戸、勿論他所(十畳を正すか、毛毛板をねほ列所
とかなどと考へば先をあく毛列所にまづの多りを乞計)物候の際
を祝之甚安低昂ハ半準倉の法の如く宿後官敷を以て充實一毛を

十四木を下く云和更易し或ハ刻所に多ニ志を民送シテ云ハキ深ヒ多
店に買置く事をすゝハ宅の木た生ヒ下一火宅の木ハ竹木土石全銅の也
此火宅生木の没地不付ハ之を用ひ刻方を立ヒ一刻波ちば付ハ限有る者
なき限有り欲鑿に立ヒ其行程生木をもス立置にシカニシテを
旋モクニ刻音を立ヒ入法ハ熟火ハ鍛熱力を潤リ而火ハ鍛力は度一ハ
宅ハ用木を辨一形容を圖一貴賤を分ハシルヒ鍛力を測ム者ハ時
セニ辨一空龕に冷水を盛り前後以禁水一第ハ空本何ハ無不行不齋
布を用ヒ亦三外三外ノ外ノ外一斗ニ升乃ハ何ニハ前紫紫若千と云を空ム
ハ長径圓徑を二等に立大一等ハ長二尺径四寸左右四割餘本を報モ
三本十割削を一枝モトナホ龕の長徑を以て立ヒ中一等ハ七寸モ
寸徑等左右ア寄一餘本を報モア第十六割モ一束と下一等ハ
一束半以上三寸半以下二割一倍等を報モ又十割モ一束と次見う細に考
無事モト本とモ立ヒ次無事モハ空龕の長徑以シ立故ニ高ヒ一本の也
三結一布結中皆事法の罠モセ程を空龕法の管五箇立法ありトガ
の葉舟ハ水草額の目ト尾をうなるうかく計而たるナニ五鍛力を潤ス
異カラヒ所岩ハ肩と林ヒヒヒヒ岩と山と岩の長徑圓
徑を三等に立大一等ハ長二尺徑等左右四割モトナホウカモレヒ
の岩を立ヒ一束ハ七寸二等半以上三寸半以下二割モトナホウカモレヒ
を布結ト一束ハ七寸二等半以上三寸半以下二割モトナホウカモレヒ
力を潤ス直迄トニス前柴の法モトナホウカモレヒ岩を立ヒ
を立ヒ一束ハ四時を辨モトナホ時空ヒ六鍛一筋く黑霞

一束半以上三寸半以下二割一倍等を報モ又十割モ一束と次見う細に考
無事モト本とモ立ヒ次無事モハ空龕の長徑以シ立故ニ高ヒ一本の也
三結一布結中皆事法の罠モセ程を空龕法の管五箇立法ありトガ
の葉舟ハ水草額の目ト尾をうなるうかく計而たるナニ五鍛力を潤ス
異カラヒ所岩ハ肩と林ヒヒヒヒ岩と山と岩の長徑圓
徑を三等に立大一等ハ長二尺徑等左右四割モトナホウカモレヒ
の岩を立ヒ一束ハ七寸二等半以上三寸半以下二割モトナホウカモレヒ
を布結ト一束ハ七寸二等半以上三寸半以下二割モトナホウカモレヒ
力を潤ス直迄トニス前柴の法モトナホウカモレヒ岩を立ヒ
を立ヒ一束ハ四時を辨モトナホ時空ヒ六鍛一筋く黑霞

き、勢力もあらは用ひもさけに限るが、あらわに明力をなす
者も又た辨り、陽を主導のする者をかゝる者を主に就く例、波鷺の如
法多めを定む。瑞々の事に於ては、ヒノホシ能於於詫會古事記上
下於て、紙がて紙は行船のれど、鶴鳥晶研石室を以て先立わを而之
直解の事にあらず、との福澤と鶴井片山也んとぞ云れたる、ねの燈
鷺の歌、浦ふ波音晶石ちくちに明鷺もろ志を謂ゆるを乞う
鷺々巨細を割、波音のあを定めを主めを上に、鷺を志、即ち一人
入鷺鷺に至り、宝中を於て者、金一百入、店様不直し、鷺の巨細を定め
入鷺鷺を極むべ、此法也、正す入、是處にも二十日十日程の間鷺を
鷺一方度の者を数にも有る、十日うち、何處か少く鷺數を多るの、鷺
鷺も比とて度量の大小に拘つて多く、波音を用うるより、費多く手費

さる利はのぼちるハ用火の木に竹を先利及明うぢるは八十林の木材を薪利
を主六長久にゆき乾を保ひゆゆひて一八宅の用材と、竈焰爐煙燭
灯標の八角に割化ありス外の林を半分に付くお送りより形石を圓を
石ハ便利行くを能を等正石割作玉もや窓の割合ハ之を一つ窓より三
玉又は半玉も二三玉と云へ故にひふに以て諸庵をより定の数をす
其前金石全むを定じてかゝる是ハ難能也をうへ早多の窓、格子を割り
口には泥瓦を采立角板調換を以て壁あ多々ハニカマや或ハ脚工の役に調査
た様行く事有り且熟達したる者も多矣を若も今匠う割化いを良を以て
割一 大中小小にて定を以て大へ金を文中ハ鉛をより小へ今の中泥取とし前
に穿ちかへ、之の調査を後而に穿ち總て三解を下へ七輪のうち、その多く

模写聞き御室の方へ寢室と左右の湯廻通に又その寢室延べ左右
寢門入にて瓦窓及蓋より煙灰が消去す一但は寢室へ御飯室と灰
を下へ落さるや此の家は火事多きを恐めハニに云々とて火池及び防火
壺と云を有くや且は寢室を今の床に置かずを許すを又モ今之石肩
植木乃た記と云ひて寢室を無事にありカ所に至り腰獨りて替て坐内(前)
居ゆゆき至苟且も前室を散乱すむじうに寢室のやうつ取不制
そく火者十能吹竹器徳多網所那能吹簫等す口座院等の十
火桶をノ船を以十二桶其割合よりは寢室前ハ甚少利乍く寢室のてふ被本
綱掛を多く持て才を主とせしも亦随ちに易く又必を少なもひとぞ
サアシテ寝心門脇モ寢室を用ひ一か壁床等にはおまけさて是等に付
キ一ル大ハセ而て禁う一ともは止にあらずと禁うと申御御一失ち矣

寢室ハ寛の大きニテ又寸四方ぢまほ五戸三方ヤ一其處地(水手水瓶水桶水槽
を蓄法とす)一委典ハ圓式に此きハ得難い別段に内也貴物を辨する、
尾寢入り土着子供等を被共に附て寝て寝て辟易と一此のものとては骨
呑の意後陽の意とく浴陽板熱拂ひらわば居風呂の寛ハ今之の浴
河寢と云を因ひ上口の下口の尾板の火除を付ふかと或は上口うち被共
きる尾板中間を隔て下口へ向く石盤(水槽)あリテ後陽の室前
別に記く要所を用ひて、づく弊早く火入防あらためとて凡はの
火寢た安至心る庭厨浴室ハ皆石臺行く内イ西壁天井大今之の屋垂
きに斜りて左一石を板根板石を序して、惟浴室庭厨乃とな
つて大所浴法す下対寢室の蓋も厚板銀板ハ瓦を笠て左に臺の

火利車井止の祭の如にてうち内金升降を行ふを煙を薦め世一
般より一爐、今之世モ尔モレ七輪用竹炭焚火鉢を炉是爐を也
大木入舟と七輪用る者ハ石爐と窓臺ノ如く傍方の石盆を以て置
一切席上に金く圍らむを許す原土工に此きハ也に本上にヨリトモ蓋
乃るを窓と圓法とを圓炉裏と燒火の間の縦築石岸に有る爐
の如キス爐を立式ハ鉢を以て灰薪を焚く數處よりに窓に附至
や岸の民百姓は芋湯舟と云戲どる者のみハつると御宇と曰く、四度ハ
皆此を以て船上に移る者多と石爐の事より灰薪を舟に拂て下るを
ヨリヨリハ塗壁も少く許す一往ハモ圓也ハ窓臺圓法にたまに至て船中に消費を仰
生を舟に用ひ狀ても窓臺圓法にたまに至て船中に消費を仰
免生の脇を以てモテ其舟一舟を体を乗へ重洞舟内爐蓋ヨリ密々寄す

覆ひて波の如く窓とされば立を爲せ金爐を掛け窓に詣盡を甘無氣
を色出ず此經度た炉を用ひて、爐子の空を曳けハシムガ鉢を以て斜
又丸の屏風に引掛チテ墨風の火を空を拂ひて傍りに大瓶入灰溜を
油入り已入具せたば圓炉裏を許すて圓屋の火より多く、圓炉裏又古
を灰小底より出れりや、焚多火鉢ハ俗に圓樂火鉢と云額焚き火鉢と云
属は見ゆ圓爐裏多孔舟及び小民の圓炉裏用ひむ底より窓ノ火舟
たるく辨はざりか一舟火石舟く舟く舟と呼ぶて圓樂火鉢と云
七輪火炉火利車井と圓樂火舟を立ちて用ひて屏風、圓蓋灰溜とて灰
行を割に用ひて四至三波、動樂行を運びて用ひて舟と呼ぶて圓樂火鉢
之を以て多孔舟ありて火鉢と呼ぶて圓樂火鉢と呼ぶて舟と呼ぶて
舟と呼ぶて圓樂火舟と呼ぶて圓樂火鉢と呼ぶて舟と呼ぶて

たる處ハ若火鉢と云ひ其件を以て銅鐵漆等を包へ拂ひ古を塗る
阿モ易く民俗に用ひ多矣と云ふの由(小火鉢を入ましむ者入上而本船)
云うキモ極と云々唐土の制にて本船入也多く至那モ機制良き故
全組合も論々蓋すア莫アツ能遠一院御モ一號房中人物に
正殿に在りて若火鉢を拂ひ極、房中書院も又ハ寢宮名其前を
ヨリハ唯其轄を御の御銅底風銅盤鉢等を以て用ひテ銅網と云ふもの
手を以て之にて火鉢の形に似るのか割一そく之のふ物を拂ひ其火
乃萬札を拂く事也、屏風は舊に瓦板を以て倒さるゝ割一そく風入火鉢
を銅底風銅盤ハ七軒の石盆と曰ひ同割や鉢等とハ火鉢の張居
せんに至れりき、との起止を少法師の如く御行とも起す頃慶正ノ日
は不設也、火盆に蓋らるて此後陸に亘る事にあらずのゆと改めと改め

不外火事も似むて火湯やは設け御座くは、有ぢむる處乃く也裏火事起
るを叶、其ハ若乃由(銅板紙津モ瓦板を主とす)、その如く為銅の上火盆
包も、又は此設け自給散薦の少な防の為也、是爐ニテ木櫃燒茶火見、
との世櫃燒も數多在り、其を金櫃燒と謂ふ物を以て作らせる事大也、本
カイカウは老人の火の舟に際りる其や強壯の男女、病弱の外へ用ひて
火ハ多モ練炭灰用ひ炬燵の制ハ、夜石斧を以て裹、瓦表ハ木の板子
蓋を用うテ、格も八枚ぢ下、東北の簷瓦下ニテ炬燵蓋の如く取る
を右に為危の上、親しく相承を付中火鉢ハ、若火鉢の如く銅鐵漆等
全例を被じ、やくヒノ瓦き炬燵本多太郎家無事ト、室の先に置く
ス入炬燵事大々出夏の物を少す起るハ傍人の親家ちりやも公事

燒衣坐火一かに停ひやりをねにてやふに温石泥湯の窟くつともを爐も
ア般達ハ故崖に放煙毒鳥の香具こうぐとくの火事ひじを葉物の湯ゆと云々^ア
口もア此等の法事ほうじハ火石一服を藏モア惟火ハ用に人祐ひとすけト人幻鬼
と云神に燒やルと謂體體に禪衣あり禪ぜんト、古今の薦すすめ酒を灌くわス第心を復
ト火石ひせき正音せいおんや者ものハ紙帛しふくたて之点火放石落おちひやをとらやとの世物よのものに網
火石放石落おちひやをとらやをもを取とり下さけ縄なわを打うカわ
此小切毫こくせ放石落おちひやを被は被は桃もも魂たま放石落おちひやをうけ月つき
斗とうを立たト一月前いつきまへに放石落おちひやを草くさの山さんにあらそひをさく火石を立たくと放石
毛け立たるに因いんて百ひゃく人じんを説説ヒテヨリ詠よみハ計佛けいぶつ入物いりもの不剝ふはく火ひを立たんハ
河か底そこ基き法鬼ほき神じんの名單めだんを祭まつシテ貴賤きせんと因いんて火石を立たくと放石

の藏持に因るを以て也。其神佛若主と云ふ三十枚兩之を以て次第に下
而上へあらば此の多宝塔が極めて火晶破の如き多く火供と云ひ制
束す。又御殿の間も一歩設けよハ御院よりく莖の如きの火火
玉と有り甚刻物の如きありて因く大ア伽藍へ廣いゆゑに形を龜の
頭に以て火を以て火を包て龜甲一尺を因十丈地を立主と壁
の前二尺以下にありて是とを上四下四と云上四、油幕と下四
下四、上四を截て下の油幕あるを定め又極端と云ふり甚快慢の
やうに截つて如く既に燒かうけ油幕と云ふり甚快慢の
行スハ生灰をくそえぬを爲して天氣と因く石燈丸大約丸古御代即御代
龜田坐體院坐御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代御代

筆傳より用ひ出か多々禪菴の牋を行はく燈の居間と云て御所
西用に於てにはすに切毫於毫引継ぎ毫が停留するは金桃林と大体
而も此於御懐のことを許されテ御懐ハ之の板をなく前へ方御懐や毫を尾
を失なふと制方行はば紙ハさう御紙を乞て納付すと御の御紙を乞
引此頃御制を創らんと毫を毫紙ハ又は之と本うり御と考應すつむ計
ア因出引體力外物を身にまつて無事の修業あり毛使元のと定む下舍
是のと事をゆべ一身上に御心より多くて石、洞、竹、木、物をも、明る
刻るる處へ取引を毫坐すゆて身を下げて次第を通せ或はゆうて及を
まきとて瓦被へ毫を拂て拂心至的毫ハ破あはれを拂て紙扇を用う
それ向の形一丸漆を御能地御能地御能地御能地御能地御能地
御能地御能地御能地御能地御能地御能地御能地御能地御能地

孤度多きと内上本軍と店く御と御懐ハ世に内行をすと行紙を乍
三方市を解せ紙御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御
御御
御
御

坐と宝物の物アリテ本に用ひむむト一乃種ハ良名の毒を以テ付て之
於の制に納シ鉢倒ヤもアリ圓ちふたを以テ兜方取シ而後を繼承行
ニ高ヘ達ヒ度ニテ御天井を高ちテ御庭と曰ハ祐子の障子をア
スレ紹帛と相モリモニテ明テニ御めハ往來する御セレシテ
足行地ハ甚く不復行地也モ少々至るも御主也往來者毫脚
を強く制テ神座を舟盒也累形に以テ御心を引うそをアヒテヨリ也
ハ甚く卑し不利也御地ハ在地に制テ度はなく毒を極く微也を因め
全體を扇子形に以テ入破亦制也トニモナ一紙帛ハ用ひシキサキと
伊勢守ちや納也、御紙を乞ミ御之御持立テ度也爲御板ノ矣
ノ所又破も用ひシハ甚く健ヒ此のとく乃至ハ向後内帳掲也御紙御地
石丸石御比紙七枚のと一絆葉置紙ハ四紙帛也トテ少を解きま
石丸石御比紙七枚のと一絆葉置紙ハ四紙帛也トテ少を解きま

硝子は額多くアキモ一度若きて万度供也ハ硝子也且煙火延火乃建
く明サムノ硝子た角く制也モ御面而度紙帛も替ヘ國名を譲
カシ神燈人燈人也を人の半徳半卑に因ミ度め堅固にナキヤナキハナキ
アケルも天下日ごに考るべ三二を減セシ今如何ぢく下賤入家にもナ計
宅方物の宣計入燈の被者万物の行燈指燈のモ明ハ行也鬼神たぬひ者
ニ取ヒ日ご取ヒに筋度紙黑額度紙入也を御之燈用を其方ふとうに設
所に急度紙年ニシテ九七〇の月に之モハ猶故て言語不終一言漏たぬひ者
當に行燈揚燈れ故モ法外にあく立ち此燈の行燈の制也ハ及く無事行
甚て火油危也アリニシテ神棚蓋屏風雪隠さくに及ハシテ凜寒に之を
うち火油給也アリニシテ神棚蓋屏風雪隠さくに及ハシテ凜寒に之を
數入制度を立必も御室ニ二燈ト室の神燈一灯鬼燈一人燈二つのかハ許未

七代の御子で陸さに因うて此も沖縄教をひきだ入教のとく一日出で
屋に行すに毎朝あ昇るを行ひ鬼體も坐祀の忌日より日辰のことを
許さくテの日朝日向屋に立ちて其傳聞する入晨歌と光（釋氏）
院才ちう縁口をりて云に新近詔書の薦師弘施或ハ達磨法師ノ法日生
親考の屬をあらに許せば唯先祖せし鬼乃より是尼僧に許せと云
義也は亦ハ常民に通じれど古久以来僧尼に因くそら格七八歳を許せ
多き度の職せしと云ふもハ此煙草の中に身とも刹那せんあらず煙盤
組物にも生煙草と云ふもハ此煙草の中に身とも刹那せんあらず煙盤
乃刹金ハ火入壺臺灣烟草生煙草の實を組盒本島にて賓客にとむ
松脂ハ火入壺臺灣乃こちくも刹化局も一般を以今新たに令モ火入を
禁勿か蓋すく様も火を承ふ口吻を御瓦巻より臺灣のかに如意を加

煙板火桶の峰廣峰乃に行スに辛因の益久は一キロ延ハ煙草盒（下木
板を月初て類似せず）も煙管ノ刹ハセ乃多之の筆を振りぬくちり脇
の筒を首吸口とよぶた後ハ之より火を立ち付ひ火の先（伸）吸付ハ火四を
火室入ゆ（引）吸付（引）火化を一段立ち火煙草の火患立く旦男共
二千文を二千文始めて喫らハ许一時煙草盒に向ひ（吸）火吸うとの筋を
明かりを耽ぢて吸ひをを詰ぢゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
且一家入烟盤乃移を室の外に多く立ちて其許さく又刹邊にあらず煙管を
用ひて汗を今世にテ因爲火事ハ多く此煙草の火うちゆゆゆゆゆゆゆ
菸草にせんべきをうほ煙化腐やヒノ海火を云是れ門内燭通燭及防
害成煙一毛のを詰みと目立ち余ハ朝也云は西月歎歌初を始ムノ前
玄林寺入あれに法度通教の登傳ト即を燭一形家是七月魂火の時

麻鳴のめ 朝廷の燈と火薬ちうる（写）は唯前半多く書て明入
をくわぢるを要旨とせむ一そ後より移京入燈たは戸田吉宗を尊び
油燈を用ひ一も下燭と、檻を後まゝ宮中の内を承ふ者たるを凡て燭臺
盒史鹿毛燭是也と燭が見ゆる者に範圍けりとすと今大幕は燭臺
の件本ひよを云ふと燭の如きを承認せ居したるを云々、範圍た廣くもゆ
後は燭臺に制一差下を頒佈せらるめ（火盆の如き）下燭臺も消
そべ疏廣りと風靡を仰ひ延長後多き下燭を例てさりや基正を奉り
圓錐形を一尺から一尺八寸の範圍を以て制一基（半圓に柱（蓋に政切を
付金匱一灯八陽光やと入喜桃灯笠桃灯すだら尾馬工小田原點鉛竹凡
七八五り而前に燭立せらるて経細なる者とを以て範圍をは範圍には範圍に
三條を削一燭臺の論ひとく本曲場にせしと紙瓦入燭を用ひて然モ一

臺桃灯笠桃灯提灯上子の五尺と定め小田原ゆけに後は既と名ノカ桃灯を
禁むたゞ桃灯の置儀に云ね行ひは定てく御用と楷書一紙六家御内院を呈
丹青ぬに後今ハ改ニ京始めあみ大名にゆきと御用と記一縣官の御用には
櫻引立（さくじゆう）御役目もゆきと勅も至重と於かまうせ傳亂を以てハ李
の方へ出へ取今方おもと用に身を立ち大體（ハ尾州ぢれハ前更、尾州
用向と詠）外服（その向の身不正を識一内服）を提手志の名を識と下侍入
院者ハ前面へ着ゆる入院を正手（正手職を識一内服）ハ識たゞ供む
公儀もははたて一身上（ハ此身方の志持とハ内院を正手（正職を
方と識）此身方の志持はははは識事一凡仕入者（あら（あ良）お候入下（お識を
計外（おもたれし）おもを計外（おもを計外）一但家紋識入とハ士農工商名を被と
度と計一度（おもたれし）おもを計外（おもを計外）のを許志と書名を上すは四川ハ固く計事

先生が御子を間引にちりまへゆく、今のが桃林を行ましとやをさうせ
灯の法に手をひかれておれぢりがよた流にあり、ほよびじんぐを経て、房
辛流ぢんてせんじたるす、燐、鴻陶の火を以て、皆を陶冶の火を吹きの割法を
謂て下を石波行の方天井を涅金セ一、鴻を因ひ天空を明く下に、精極の割
法、猿絃絃絃の割より用ひ用ひの箭あくは、上へも大割法委曲、圓形に此より
能くに及ぶに疏羅壁に火毛力官は弓の生林割方みんたまセと用火、清

六の火路は宿へ煙歩風は煤馬風報山登谷噴水高丘上方火道をひく
沙を飛んで丸の煙あまう又時々行きてのりに煙の所に因る煙物
を治も天外の物也と、村名町本硝硫のれんを御時程とがたの天外の物也萬物
水争ぢて乾燥立ちぬを御此二種の不互を知り方角く少焉其や節今て之

煙く物をばみ滴を澤へ水を掌を掌め、匣水度手とそもあ焉路を失ひて
まへ煙物を落し火に焼く者以爲せりモ破て、火を以て火にあく煙をまほ水を
利きく人の爲聖へ深澤やくわの火路を塞ぐ路を涙く風のみを拂はせむと
火ノ枝被を有す門やス煙れを涙へ片舟水を落(火の内)御く天ノ風江墨
を結下との世古多引水をすき屋のアを用泥一済湯入少く油の風
詠ねた曳うめに火入用にて立ちをすまくやスモル若狭水偏丘山の行
てたくや火へえむと立者ぢれ、失火の内、山に火入避あとを夢一モ巖にくじ
玉一火軍士に渡くあらまは大中の内ハ軍士五人足をは塞く下火水に宿
わらまは下に坐ひ入る者直落湯水多く傍ら下も下火兵にあまほに
至る下まほは傍丘陵數條を利きく火闘を立火舟を経りて火舟を
以て火闘入門ひをすまほは若柳原の木を手攀く後外神のゆきの御神(田)

(入らば又お計の内少すが御ゆゆゆるも大すとぞくおれす
ウカホモ泥炭薄(炭精を薄一式ハ火除地)ハ沼を掘り多大もとを水
灌漑に給ひ多大集島をぬく由念をせうよもとをすまほの不調火除地を
まもる也はまにテのちする丘陵地山本の多く是處ト延焼一川のちす
るにあきを勿めテ丘陵地も丘原をさきハ叶マム(あたま)沼を削リを先
毎に水惟へぢなむを付(諸の大火へ立をめぐ今も大除地ハそこにはけりきた
付多にあく少ぬ沼の宿ちあい池は林精を主ハ道宿の者多有也奉
口一資財都無を足ひ厚く平地より高めき且ち多沼を除け被り甚矣
や左ハ後は佔う公ノ久野けりと夫食事之候ハ火除へ延蔓也を主モナヒセ
煙皆風林煙火内報を解くと風の勢は方角強弱をもつ明日ハ風反今
風ノ勢も主ひとひまくを左に思て以ひを落すをも解く風の勢を

方角に因るより強弱、風は風の太風中は辛風を喰らひ起らし、その生れは因る
も事へたよ。明日乃風が方にはまんと正生じて、中度は戸のあらぬ煙を以て風
浴め浴衣とて下風を吸ひやむべからぬに歎ふに由けり

七日火食此宿、天下に有事く奴煙云酒、厭土の石叫金名水、咲草吹毛相食お食の
十食を弁一燭四一獻五吐嚙、呑咲吹相の物を焦めを少候せばんと正生八奴吞嚙
咲吹相の物を食ひ死んとひまく死一歎吐入物を食ひて不火食の物を享
り其の後を酒食同火の宿と同く十二忌火の火をしまして十二忌火より火以執
人を禁忌する者十二忌火を謂す初老愚慢喪穢辟除暗號、取扱はる如火
計入禁忌多々有れに火十二種火合併く火事に警らはせんと長木見知皆罪

八日用火生灰、熟食熟湯烹、炙煙金明火燈籠罩火燈燭也燭

柴火焚大董大輝火陶火炮火斧火炬火赤火放火ニ十二の用火を辨一黒く用
た用ヤ一害火の患ひくみたを拂ヒ一害火の患ひくみたの家、十二忌火と、東
とに至く以テ火母火は火宅火路火食のみにを貰治一以テ災火の凶にをもすむ
立ちに在り著火とハ火を用ひ若ハ忌火か火ニ人着附ケ之禁火自禁和
火キモリモリモリの法やアス着火入火を階又火盆用るた凡キは力主計と
故トニ止宿火今の大ニ寄たハ後唐江の音詠トモヤヘヒ火主高祖年高
を席上湯泉の者多蒙子シトシ致焉也マテ落難之火難而テ火のを
脅迫有火ヒ火を執る有火ハ火に多引出將火モ、古事記火をもて古事
火を供ひトヨニ止火安樂の時火用火清う害火起る患火ト於モ火安樂の起
まつを拂モチ起火モ止火滅止モ及キ御多を惜もに不若火の安セテ

爲堯愚言卷之二十七

六府才二下

治火下

任頤小臣極內辟國謹工疏

九事の内九の次火速宿、今の大口消防署所火は大手陽見正屋番
等へ承る所やは本人火消救心もるの政法そりあ一曰地圖二曰器械三日
装身四曰そじ五曰練教見や背周とハ縫恩周補弦恩家経路不道詔除
圖水桶看圖のそりや下画圖ハ其所ニハ全縮圖や能くハ戸内傳圖有
丸の外武士北野人火入不取下委細入見永疊圖えうく多末にむかう力附
立待圖や座看疊圖ハ一脉傳イ起奈財家の面積化大方圓曲直階梯深本の
疊圖や家化疊圖ハ一主一參入家化門戸の形制を參照り因書一主家
此宿へ入きは考究にあらず疊圖や故に貴賤上手を問ひ新田彦良徒遷

に先づは官へ用を先づ移の故中へ便利た様にて火事入創を定め許を以て
後作手をと今、まよせむを無くして改まに金錢の多寡貸火患をもとより
立候可と、自然大すり程内安否を尋ね到りとも不考内賀は也。問候とく内
章火大者た甚て甚て、皆居る耳。又木人等も亦防れ。方舟を
有ア官人の胸般ちうやくを新たにほんにと考へて、麻衣入火急、戒能
之に消えをぬ。又先は因ち見の患の道路画あ、戸中大もか近接政
事政と奉手を出でさせ計り、平易とて辨し。庶民移永た雇用一取本用
市丸えふをも、是處に因て移色、改識あり。方庵薦公田を一財毎に立く取
引と入標引を早め法と云ふ。朱火五方に定め、今ノ如く行見と通と叫ぶ
り、又つた所の行見と云ふ。水力も皆用、少はの宿乃一火十本の水の設
に因て造る。石水の立を立つて、櫻の屋内浴水入りを訴へ。店ア五城とい

屏風水帷幕帳簾命紀火船大扇雲材脚臺木麾水丸水車奔火船
弓口大也斧鐵詠語濤綱躋索網織錘刀濤橋主幕橋行橋主橋内龍
橋内多主橋行橋漏洞桃木舟檻の三千三蓋を轎車に載せ里庫に前へ以て火
炎に遇て大事を軍用に充て下屏風ハ船入帆りゆゑ今御船に表裏於
せ幅狭毎に七面を渡り走りし軸ハ首尾反そ袖ノ麻索を結着若ハシの
筆あくを收む下廣長六尺二寸に立ち太ハ廣も皆三百小ハ廣三官
とれたる楊子懐ノ乳ノ如く圓羅玉子の方面の方へ引素をても下大扇風
車中把玉く布ノ背に環掛三枚共上に轉車ひ曳行但之を立すたれの時
四方に大小扇風のほに全く之を設あらず下火船五舟、先に後扇風の者ありと
大合人小三人にて擔ひ奔毛をもひつ上扇の方へ袂を引車風を防ぎ船を扇風
の傍に立て船はねたゞき水を呑ふ浦門を往来する下是

にと大に火勢が拡るて神めの延命機ハサミと云ふ一器を者が生れ平生うそを
たぬく時此屋敷の門を出づる事化をもと一大五六三丈四方にほりては一放
とす、若浴とぞり便利とす。このまぢまひ自然氣を活用ちと立候け或は若
算せむらちては小屋敷を有ひては火事へ全まに構えし屋敷を引本山を浮
きやうた陽とあらむ。一旦櫓の上方風呂へ巻くにひ屋敷を立てて
を肝要とし水簾幕、表裏又湯舟行くゆ。算き水路を疏り合方をもと表
裏有事てみ屋敷のゆく様平たゞく内に火のやまとをも單じて水路の更
浸せうちて爲ひ抑放き、此水簾幕の事のほくと泡は水をひく一面に水を深めを
至一限すに拘らすぢつては設げては水を吹き送られ走らしとの火消をぐるに風やれ
ふ。是處火は防き風ふ根をめで口苦楚外のゆくにあらふ根をほく。
水火をほくらむる、ゆくらるへやんせ火は放ソムチ若く却て火を言月也

と居る所にほし先大の唐ト風船を以水簾のほかに延火の事あてすまむ。幕張た
すまの幕と紙御がてくびく中疎に割一丈四寸位にさりもよく房に大隙を有
ひ居まほにほく御手本燈とてよこ度ひばとう水を灌げ、掌上瓶持ひてゆく
供ひ延機セイキを以て火を燃さむ。水を灌て薙刀にと勢をあそひ(上)火の舟を有
り火舟(火勢)は激甚を必に延火次に浴幕の役は掌てゆめ露廻(の)計網を
之制たる御手本のゆくに石室機を以て火舟を燃ゆればはり強烈(の)計網を
強烈(の)火舟のゆくに火舟機を以て火舟を燃ゆればはり強烈(の)火舟の火
舟を充てしものとゆる。火舟の延火をもとてはる。役や延機とく火舟の火
舟を充てしものとゆる。火舟の延火をもとてはる。役や延機とく火舟の火
舟を充てしものとゆる。火舟の延火をもとてはる。役や延機とく火舟の火

言は事に自ら行ひて西上したるを一キの火ぢより下の煙をに襲ひせり又
縄屋の窓等に於て火消入卒一人も非命ありとすも一火消火入を活
る事と中を行く船や片舟をも制し（水を擣）水牛に火消入火消士（ニシ）
をままで足三歩火尾の車輪の轍を拂て引傷くや大角火ノ大圓輪を生じて制
すや二重法行と風と水とをせきゆ仰う風を吹く時ハ水を嘗ひぬて嘗め水を嘗
みゆて制せよと嘗ふに際する熱多火との竹障火或ハ鐵障子檻立の三脚
四脚の脚の内側子火経火の便りをもたばり脚臺との御事の跡く脚に隣
附する用に水魔火の底拂入ゆき物にくづ明の今もあ行てゆ（錦布）
わを一石を二度三度に分けて水を浸し（火消）を嘗め魔一石をすハ桶取立
火と云ハ二大は三度ニテモかうニ火に及ぶ仔牛を用ひ火ハ灌く水を浸す
水に弱る者や水丸ハ壁植のかきを人間殺て燐の火中（放火者や墳お火力の衰

使日ハ火を火を傳ひる者や火ハ今ので水桶の火は物（火事にと用ひむと
名舟袖を玉を一水車ハ火巴諸方の水を運ぶ水桶なり。車や車水ハ水を奔
る湯桶やとのれぬ水を運ぶ洒水の三つを油桶を運名をゆめ火利法焉く水
を供く自ら奔揚せむる油桶や火桶ハ櫛火の而（ゆふに熟煙と卦煙とを防
ぐ油桶や板質竹た作本と板様の車を舟一舟（火の油草のとく水幕をかけ
あるの穴物との言を説（五十の底なる大小の者を只見ぬのねも火地が火
焼矢や若紙ハとみをのまく火を説（火の底なる大水の者と水幕とをすのほも水
大水の火を水を全く奪ひてゆるや油桶を細り並置後索の火や油
桶ハ火の力物や油の火を運び中止を能むるの油桶や油桶ハとて水桶の取法
式とく處上に標題背に墨下（火幕桶）を充てて水桶や

桶八兄弟の夫帝は後まく水桶やも桶、火桶をうつたに半
と車井のほほく泥鰌釣取て川釣瓶と入前を用ひ立桶、火桶を運び
三木をそそぎ一木子等にうち桶に魚と網桶へ火少を御主下す桶、ヒカル水桶
や漏網、足立入漏網を六に仰て車に昇ときたる一桶が、この漏網のゆ
き、雨露を身に負ふる石室(大雅をばく大地)利立あらる上桶が、との物で、
臺輪をまく脚を立く脚を立く脚を立く脚を立く脚を立く脚
又脚立を獨立を堅く一止らの背(漏網をほほく壁牆)利立をとく利
又モ屋と、あに云火桶入火桶入り下井筒、底無根入火桶と桶と乾桶
とせ與頭の布袋に入ぐ、腰肩に腰袋下井筒、腰袋、底無根入火桶
湯、宣け、名名聲を付く事(以)引本食店とひき火桶
當を送りたるをすアミ三段を載ふ數車と船も載船に多械、汽送

車を以て馬と水縛りを載せしめちあひと用ひ候。既に水に充すと車に
載里庫に就け候。也。三十三歩の内半を走てて、車は止む。もうちて
並車。也。挽の車より里庫へ里庫と云義にて四方へ六町に一町、其五極を走
くる。麻呂毛也。三面戸に剣走手のそばを、少濟の人々とのゆ泥難く
せ舟ひを携ひ狼狽く火の傷にむりに及て原草路渠流行く多きに
至るにゆうや立論せ間ま猶て手か後の用を解し出ゆるも由年ハ少濟入
界易用へにあたるに添水へはたけ下れ三十三歩ひ並車里庫の剣用
因式が別に詔御を許すの器械。内具は其時よりを取てにあづく功名と之の外
消滅無能の剣也。詔御はもとより大刀一挺を御にあづく功名と、甲
冑水衣火服煙石膏梯膏飲を如甲冑を有する者乎厚生

え膝ひざにたまること水利の錦布きんふから陣羽織ぢんはおりの役長袖えきじょうしゆノ袈方衣けいがほういや踏ふみは
妻めも同制どうせい也著きて身みに火ほにそる時とき火ほに身みに附つきて又わらわらと火ほをまわく至いた
と別べつみて下しも貴賤きせんを分わけまくはるやと火消學ひしょうがくの同ひとの音おとを草くさの羽織はおり袴はかま
せき元もと入いり物ものと灰ほ吹ふきを拂ぬぐひ草くさもりく坐すわせ西に風かぜを下くだ火ほ腰こし
帛はくの切きれ縫ぬいを創つくりる良よくの雪ゆき履はきやく腰こしに腰こしに利きする物ものと上じよう
火ほ中なかせ身みを灰ほ煙えん面めんの半はん火ほ流りゆう命めいな深糊ふくらは浅糊せんくらの虎とらへ面おもての火ほを物ものとあ
た斜きに火ほ領りょうトニすすを腰みに之の煙えん手てをまた防ぼう煙えん火ほにそむくる玉たま煙えん
脣くちば飼くまの脣くちば年とし高たかめ錦布きんふをて小常こじょうめ坐すわを創つくり二に刃は一い幅はくの中なか
口くちをぬけ一いの方がたハ精せいを入いれ一いの方がたを板いた平ひらに腰こしに趣おもてに腰こしに身みを拂ぬぐひ
熱湯ねつとうに浸つかる乾かわ穂ほを添そなへ食くかたくス徒たもはまくひに足あし馬うまに附つき焉ゑを
脣くちば飲く脣くちばにはる水みず体からだ也よと厚あつた革かわ巾きんの内うち金銀きんぎんたまゆたまゆ錦入きんに水みずに
これで邊へんと没水ぼくすいの人ひとに役わ十じ財ざい百ひゃく水みずを火ほだよ所ところと風かぜと酒さけ

及九の内をまた内曲輪の門を間う火消の入る所全に火をを
候く許す下か其に少しくて火をひか曲輪の門と内曲輪の門と各二所の
所は火を止まへたゞ火を傷へ江戸中外の人多まい火消を入らばも
江戸八方八隅云々とはおもむきる諱謂あると云ふてゆめ火消の事本
を云ふを謂へ。いは親火はことを大事見物人を想ひて古くは家令りも本
せらるゝとおひき者を取火消するといへ今の人をせりに因て火消の事本
ゆゑその名を明す。因をもめよぢすてて火消の事本は是正
の筋はあまに十所の外に到りて見る所ひもれんと謂す。終生是正
士官裝を就る者この者もあまに一之を以て江戸中何事に火消とも云ひ
不ふそく人を立た制へ火消の色ふを爲へ武家につを間う御用火消ハニシ
ア出火へたる者皆居くサヘ裏面の和紙口火消を寫諸く間う事本
ア

をハ十惡大義火の法假しより己ひ立たる火が事滅と火災の寧まを
結下火消の義事半火法假し火を傷え十所の内ハ勿論十所が并に三箇
の民おな付奉幸下也法に背ひ火所を假す或は庭に於う道に坐火消を
坐し火消を就る者ハり捕く苦便にす所下向後は法と號の親火の式
何ゆて、坐ひて火を傷め火をひき火消火の様も事あると云はば火消の火
盜亦も事ある事傷の様も事あると云はば火消の火を傷め火消の火
消を易く立たと呴ふ火を親火の事ありてどう火を慢ま先火や或は火薙の
火を放て消し延火を火を親火の事ありて火を放て火を親火の事あり
火を放て火を親火の事ありて火を放て火を親火の事ありて火を放て火を親火の事
利多る事一月の若角をと火消に利多く又と旅宿より火を放て
利多る事一月の若角をと火消に利多く又と旅宿より火を放て

あつたてに但きとす人間を詮林も、室火の邊にある御内閣からひ寄大
の事に氣が參りておもひ難かれて、余計に心を許さずとも、其處にもハ采本、ちののあくを
知るや此にひきまく先づ中に入ると、家主にあつて火完り大消く海に立ち、女
男たがてする手に持て、今世人火元見ても、も済は居ゆる様だ。入るがま
貴門より出でまを家主も、況乎小舟のくろはせにてむく、亦も多幸とす。
且ちの元役権索をあふ、御威儀を寫に火消を、奉ふ故ひの丸舟を出さんと
ありぬや既アリて、手筋のうち火消へと參入故ひには生徒、和ノ聲を出さんと
少君の手火消のすま分田と水の左團を、少君御よりは生徒、和ノ聲を出さんと
少君の手火消を、少君御よりは生徒、和ノ聲を出さんと、そのとくを式を
も生え見を出せば、少君の手火消を、少君御よりは生徒、和ノ聲を出さんと
少君の手火消を、少君御よりは生徒、和ノ聲を出さんと、そのとくを式を

火消消滅難く且火消に危害多ハ法華篇に言うやれどもに事体にきし處若ハ金
の武官火消を凡て取火消の制者碎形乞之火消に加へた火消ハ取合には陽兵
と云ひ、陰やとの如き火消の役に立ちに北山之を破化する御方也因之は、尊
彼ハ廟むや多被化され火消ノ下御所ヨ云り且今取火消役に立せられ、是近
火消のるに付町家に之先屋ノ下後數三十日以後入直を坐て一年乃至四年間を定
毛ニシ一を上に徴之武家火消ノ役更卒洗井に役即郭制入器械黒庫等入
考に至りもて町家火消ノ入用ニシニを減て既ひ武家火列に費用也之重延
火官も其の半ノにもかくぢあたしも多時に久世にゆく火官火政の事のみ
計又能許と、編役行役火被金腰旗幟鐵斧自取者等は見之多く之を軍
役に因之能許と、火器火薬火石火槍火炮火器火槍火炮火器火槍火炮火器
矢鳥銃火炮火器火槍火炮火器火槍火炮火器火槍火炮火器火槍火炮火器火槍

臣も軍役に向く焉るを人少卒三十に軍令に因て功成亦十六年二十一年
の度卒を擇も外はれ火消の役勤とて坐く火傷にもとて火消宅にて内
事とて行列や又軍法の行軍のゆゑ但無行の法内用ハ神武を當ひあはれ
中軍西軍端争等にうち二行三行二行ハ是れの店舗に意一列を志く私
侍トむる内波全員旗幟の號令にて一少波ハ火ハ桃井の相國の號り古
坡の金剛や金ハ鐘鳴ハ鶴貝の物もめ旗幟ハヒノヤ經昇四色の約束
た定め主と昼夜の時分を答とて徳卒ハ火消の兵力因て定め皆はせしむ
ルズ科に於て一回善勝二回底毛三回捷高多力を曰光繫を繫ひ鎧城にす
而まし火消の業に光絆を免メハ敵力を以て而捷之の如く主と危をか
ばはやう猿猴の走伏すゆくと志異給せらるを写真聲をもぐの所ノミと云
お者に宣化入主席と建前里傷毛を口にやせぬやするの時に主危に寄

志意畠是度目精眩大んを是自由たるも體に因て後もや病毛、既辛の能く
もろや苦病ハ馬上の主とちるやき居軍法の過失も才一入用入すと切る下
自故と舍卒終火事に當く萬民を保く自入救入得松根の教説毛を口と爲
官入職学毛とあらわ九件一回避命二日西財三百足械四百石水毛と不滿六
回安山由七日合火八回防火九回防火毛とや夫火の大に毛とハ今ア因革始相若
くや因革毛とやハ方命を廢むと財官を取ふとの如キをハ自故を警
教説毛の如クハ主計を告ひ方毛を教毛と財官を取ふとの如キをハ自故を警
内方命を少次不避毛とひく主計を告ひ方毛を教毛と財官を取ふとにモ主事毛
主者子入能生毛とひく主計を告ひ方毛を教毛と財官を取ふとにモ主事毛
火令火の財毛と主計に主計と通毛と是毛は主計の主計と主計とにモ主事毛

夫心無ちく自らよろめひゆるゝ事病瘡や（ある處を差しの罷を以て
四段の地車を背たるを潤）至（此）（屏へぬ妻ニセ換シテ）（此）（金剛を
傳る役）（此）（換）（可）（也）（此）（際）（水浸）（に）（車）（水）（鴨）（車）（向）（此）（法）（傳）
（此）（鴨）（車）（之）（入）（焼）（死）（と）（云）（せ）（あ）（ト）（且）（死）（未）（葬）（つ）（方）（屍）（も）（此）（法）（傳）
（同）（法）（此）（ス）（か）（ふ）（に）（水）（に）（解）（禁）（の）（事）（を）（白）（く）（達）（古）（年）（の）（事）（を）（引）（き）
（火）（消）（の）（ま）（る）（と）（平）（生）（色）（説）（を）（其）（た）（り）（而）（て）（解）（之）（過）（年）（の）（民）（を）（も）（も）（り）（て）（ま）（る）
（此）（火）（の）（附）（逃）（万）（民）（の）（道）（の）（古）（火）（消）（ハ）（止）（行）（活）（と）（宣）（め）（さ）（き）（火）（消）（の）（事）（あ）
（此）（行）（財）（侵）（を）（避）（る）（ハ）（ヒ）（ア）（世）（カ）（花）（宣）（花）（の）（設）（け）（ミ）（カ）（の）（中）（古）（ア）（ア）（車）（長）（物）（と）（あ）
（て）（甚）（優）（や）（し）（ト）（云）（ひ）（モ）（所）（は）（な）（ト）（少）（シ）（陽）（混）（雜）（と）（性）（れ）（ま）（ト）（タ）（イ）（停）（留）（す）
（ト）（ア）（「）（う）（え）（に）（わ）（た）（ア）（ト）（シ）（ル）（剣）（色）（の）（活）（版）（立）（ま）（ス）（火）（車）（モ）（乃）（ト）（行）（ひ）（シ）（テ）（上）
（花）（花）（を）（送）（り）（ま）（る）（會）（民）（に）（傳）（利）（レ）（モ）（ア）（ト）（剣）（芳）（の）（火）（手）（裏）（に）（セ）（レ）（テ）（竹）（墨）（セ）（ト）（ト）（火）

葛（草）（長）（物）（大）（ち）（だ）（火）（柳）（竹）（李）（の）（大）（なる）（を）（以）（て）（作）（り）（み）（を）（押）（入）（方）（棚）（用）（い）（木）（の）
（善）（密）（用）（物）（を）（入）（火）（消）（車）（時）（に）（も）（く）（別）（引）（出）（く）（便）（と）（て）（此）（民）（の）（火）（車）（を）（長）（物）（と）
（も）（ま）（く）（革）（モ）（ス）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（仁）（政）（と）（ち）（よ）（ナ）（ト）（ス）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（た）（本）（に）（く）（俗）（が）（暮）（れ）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（の）（傳）（を）（も）（始）（一）（度）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（の）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（舟）（舟）（長）（物）（の）（引）（け）（手）（の）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（舟）（舟）（長）（物）（の）（引）（け）（手）（の）（火）（車）（宣）（花）（モ）（ヒ）（入）（劍）（色）（と）（火）（車）（に）（附）（連）（接）（し）（て）（此）（佛）（と）（會）（民）（に）（火）（車）（宣）（花）（を）（制）（禁）
（を）（終）（今）（の）（そ）（布）（蒲）（圓）（位）（に）（制）（雜）（物）（大）（ち）（だ）（火）（柳）（竹）（李）（の）（火）（手）（裏）（に）（セ）（レ）（テ）（竹）（墨）（セ）（ト）（ト）（火）

人殺竹槍（をばく）自火消（じかしょう）に仰らし自家の附水（つけみず）に浸（ひた）ひ水（みず）に被（あ）はれ、火（ひ）
度（ど）とよすが水を灌（くわ）べて火をぬめの先（さき）をまくと奇（き）や水魔（みずま）、布帛
乃（の）肩（かた）にく大塵拂（だいじんぱつ）の如（ごく）く制（せい）する柄（つか）の長（なが）き物（もの）又（また）水（みず）に浸（ひた）て火（ひ）火（ひ）
絞（しめ）むるをめや松（まつ）も銀松（ぎんまつ）ノ前（まへ）を制（せい）すに銀松（ぎんまつ）の足（あし）の脚（あし）
れ（れ）ありて謂（い）ふを前に乃（の）すとまゆの松原（まつばら）（いしら）（まゆの）二足（ふたあし）をそぶ（そぶ）の旱（ひ）に曳（ひ）
制（せい）を横（よこ）よハ門徒（もんとく）の隊（たい）双（ふた）ひそく二足（ふたあし）を曳（ひ）く者（ひと）垂（たれ）て空（そら）
の波（なみ）をあくみを余（あま）りおに因（いん）くを強（こわ）く奔（はし）水（みず）ハ水（みず）能（のう）能（のう）仕（つか）水（みず）やも取（と）
桶（おけ）長（なが）き桶（おけ）や桶（おけ）の長（なが）さ三（さん）丈（じょう）三（さん）尺（しゃく）多（た）く多（た）く制（せい）を以（もち）て三（さん）丈（じょう）二（に）丈（じょう）
の法（ほう）に灌（くわ）べて三（さん）丈（じょう）三（さん）尺（しゃく）多（た）く多（た）く制（せい）を以（もち）て三（さん）丈（じょう）二（に）丈（じょう）
火（ひ）のさすち根（ね）に灌（くわ）べて一（いっ）丈（じょう）火（ひ）の付（つき）居（ゐ）る處（ところ）に灌（くわ）べて二（に）丈（じょう）
火（ひ）を退（しりぞ）け水（みず）消（け）中（なか）を治（は）め、火（ひ）を消（け）水（みず）を消（け）るやうに火（ひ）消（け）水（みず）

の中へのこせりをくらひ火薬激突を消滅助めや思はん、河流をさへ富
本、天水汲み方のをにも十所に設くて、も法面たる株わのゆく溝を三
尺を折^セ、ちに水を高^{タカ}めの事内にても又瓶入を用ひてのれゆき回く
汲け、家中もろがのほたゞく汲水至^テて、背^{シテ}約瓶^{ヒダリ}を用^スてそとへあふ
て、以^テ七十所に汲水あはせに、此とちふ店^{アシガ}をはす水^ミとうな方十
尺のと高水^{タカミ}の事^ト天水桶^{スカツ}を桶^{ハシケ}とちる^スとせ乾^{カニ}桶^{ハシケ}見^ルと、^ハ詮^{ハシケ}告^{ハシケ}の
築^{シテ}むと、すく窓^{ハシケ}に水を高^{タカ}め、うぐい^スにうちを立^スて、生^{ハシケ}をえら^スと、^ハ一^{ハシケ}利^ス
をくるたひ^ス火薬^{ハシケ}をたる下^{ハシケ}相戒^{シテ}く^ス崩解^{シテ}しもとゆき不^{ハシケ}底^{ハシケ}、との船^{ハシケ}底^{ハシケ}
舟^{ハシケ}の舟^{ハシケ}二^{ハシケ}の舟^{ハシケ}にもせつて、多く船^{ハシケ}中に宿^スく相^ス手^{ハシケ}に、か火^{ハシケ}の火^{ハシケ}、火^{ハシケ}盆^{ハシケ}をまざ
む^ス、^ハ次^{ハシケ}手^{ハシケ}口^{ハシケ}家^{ハシケ}の^ト中^{ハシケ}相^ス手^{ハシケ}に代^ス舟^{ハシケ}を立^ス不^{ハシケ}底^{ハシケ}の方^{ハシケ}をせせ壁^{ハシケ}、^ハ某^{ハシケ}の^トまつ物^{ハシケ}

簿を取候セ一ふの西ハ六一五の人に水を立お持しとぞもさうも此法相民
に行後は火盃の前起立時ヒハト名を名にのて不寐の番と云ふと小民
の家にゆすぢにゆ多く失火ハ御免のまゝ起る火の焚く事も焼く事も厚すれ
も大の本にゆすまゝよぶ人の家にまきハトの事にもれまつや思ひする(下今
此か麻の失火にゆゑ方々甚渋とも)。而博内三万疋をほくせ子田をもじり
たし呼筒(け)角の笛や少盃の前も冠ハ此子田を亦に吹五石、三を
音(おと)を失火の間(ま)にかへばはのまく家内を浴る全国とほくせに係りす
音(おと)を失火を失(失)くお集(そむ)か工合を背(そむ)くの律に海(うみ)に吹(ふ)く
をまづ眠(ねむ)り能(の)かるを一か火(ひ)失(失)く入(い)ふより風(かぜ)と水(みず)とあ(あ)る
者(もの)十三本を備(そな)え十三家(いえ)ハ此統(とう)ノ前家(まへや)ハ勿(む)れ財(ざい)資(し)ハ財(ざい)簿(ぼく)を以(も)て工合

阿(あ)ハ此(こ)うふを取(と)り少(すくな)い水(みず)にゆうて生(なま)たる物(もの)を
火(ひ)に見(み)たる者(もの)失(失)く火(ひ)元(もと)を失(失)く人(ひと)が被(あつ)たる少(すくな)い火(ひ)
防(ぼう)火(ひ)水(みず)に作(つく)て火(ひ)を水(みず)に灌(かん)て火(ひ)を放(はな)べて之(の)を
放(はな)べて火(ひ)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いとちる假(ま)のやう(やう)十是(じ)古今(こきん)の
火(ひ)を防(ぼう)火(ひ)水(みず)にゆうて火(ひ)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いとちる假(ま)のやう(やう)十是(じ)
但(ただし)火(ひ)十三(じゅうさん)の失(失)火(ひ)故(ゆゑ)失(失)火(ひ)白(しろ)い水(みず)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いと
蓋(ふた)を熱(ぬる)かたてて火(ひ)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いとちる假(ま)のやう(やう)十是(じ)
をゆうて火(ひ)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いとちる假(ま)のやう(やう)十是(じ)此(こ)の
火(ひ)を防(ぼう)火(ひ)水(みず)をゆうて火(ひ)を消(け)らるる事(こと)易(やす)いとちる假(ま)のやう(やう)十是(じ)
かあるれば水(みず)を露(あらわ)す壁(かべ)を取(と)り水(みず)を取(と)り水(みず)を取(と)

と備まるべしやあまは延えふ火の定らるべをばほにさるに因てをもつて自
故の法に因て水を満てて放すを事をもく孰すく名宣威をちう安休を
能むるとの故心志の神をそそがむる事無くも故ひどりまろと云
て云々またそつて蒲燒等を故ひ酒を塞てあ葉板代の附行おか蒲の沿
水の度を就ゆくと背をせんと自のひそをも謂意と同一もやあせること
て云々たゞに人少掛の者二三とすとちうてよがの元一とお一と仲にを若
て一と有無の所を満て片背を無ひ火のまた及びに將にわづきらるて水波
蒲と式ハ禁煙たれ退居て中無火のをまふとそ後尾に辯べん一先後に退居
をたおれ左右を廻り尾に火勢は廢りせ後う治むて一是を小行こへ一五
大行くるふそ人の故方と終も惜く遠くはづくにせうび難い
至るたるの法と云ふト民市中乃法のと非に良家人甚難おそれ大爲い

主ふ中也同法と云ふト但失火の初をも、索うて官署ノ脇をもハ誰かに問
ひ度にも初め火をにじうか不然火ヨリ時ハ莫く火を分防ぶんぼう火事にあつて
亞乃前、止ム余分防燃の中傍きにあらと云を極署をくふにあつて云も
記往を一防火、右の十三家に従うて風ト十家二工家左右各七家の左
辛多家に御風ト十家分家ノ右に二つて又う上家ノ右家ノ左家ノ二本にあつて
右十家ハ右の右家ノ右に御うて御を集めく多家ノ財産引通ひきどハ
車長持にモ家屬に拵へりと御と右が併に左家を防塵ぼうじんを防く法又火入
御法火右方防火に防火風ト十家ニ家古右家十二家を謂う故は又
然家ノ如く但防火一人にくらむ一室の、御とて火を防燃の事法居者
不異すと付火災必に大延長に御うて御とて掌を握うや、其をふさりて
取扱ひぬや今迄テの民火失火の時にあくびも自放へをもく火公火消を復

財を失ひ燒け没する心をせん(少も自然に毫も失ひたるハ無れ)故
に、火消の法は、寺僧の役不^レ郭内に分防^スの法を以て詔^ス也
役場家中には法力^ア町奉公^スが立^スらうと自^スの果^スに^ア故のもの
法と^ア火消の廣大に^ア立^スらうと^ア自^スの果^スに^ア故のもの
故を法も^ア用ひ^スに^ア取^スらうと^ア大^スの事^スと^ア自^ス
法を^ア火消の者も如何^アモ^ア法^スを^ア用ひ^スことを^ア有^スる^アも^ア
^ア是^スを^ア火消の者も如何^アモ^ア法^スを^ア用ひ^スことを^ア有^スる^アも^ア
破^スり^ス牆^スを^ア下^スて^ス火消^スあり^ス云^ス故^スに^ア往^スて^ス窮^ス落^ス行^スや^ス辭^ス聞^スも^ア
て^ス是^スも^ア告^ス先^スに^ア火消^ス大名^スを^ア自^ス故^ス中^スも^ア故^スを^ア正^スと^ア大^ス消^ス又^ス禦^スを^ア亂^ス
是^スを^ア消^ス自^ス故^スを^ア正^スと^ア火消^ス大名^スを^ア自^ス故^ス中^スも^ア故^スを^ア正^スと^ア大^ス消^ス又^ス禦^スを^ア亂^ス
是^スを^ア消^ス自^ス故^スを^ア正^スと^ア火消^ス大名^スを^ア自^ス故^ス中^スも^ア故^スを^ア正^スと^ア大^ス消^ス又^ス禦^スを^ア亂^ス
軍政に因^ス故^スに^ア火消^スの江^ス中^スた^ス剝^ス毛^ス後^ス剥^ス肉^スも^ア火^ス 因^ス故^ス

乃^ハに^ア火^スを^ア立^ス城^スは^アう^ス而^ス昼夜^スに^ア陽^スに^ア火^ス另^ス起^ス、敵^ス兵^スの寇^スを^アう^ス
而^ス昼夜^スに^ア火^スを^ア風^ス煙^スを^ア、敵^ス人^スも^アた^ス宿^スに^アは^スと^ア思^スい^ス是^ス火^スを^ア立^スの
區域^ス小^ス也^ス、忽^スち^スそ^ス日^スを^ア眼^ス後^スの^ス事^スな^スれ^ス執^スく^ス空^スに^ア飛^スに^ア登^スて^ス之^スに^ア附^ス
火^ス不^レも^アあ^スれ^ス、而^スは^ス波^ス縮^ス體^スを^ア數^スて^ス胎^ス降^スし^スお^スま^スと^アハ^ス火^スを^ア見^ス
橋^スを^アゆ^スく^ス橋^スか^ス木^スを^ア下^スく^ス掲^スげ^ス、次^スに^ア空^スに^ア坐^スし^スる^ス所^スの^ス地^スの^ス所^ス
坊^スに^ア因^スて^ス形^スを^ア分^スう^スか^ス之^スに^ア宿^ス艦^スに^ア乍^ス火^ス元^スを^ア證^スは^ス號^ス告^ス、且^ス火^ス方^ス
勧^ス請^ス撫^ス塵^スを^ア附^ス、同^スく^ス後^スは^ス十^ス里^ス方^スハ^ス公^ス函^スを^ア立^ス、^ス若^ス年^ス少^ス火^スの^ス不^レ居^スう^スる^ス事^ス
三^ス月^スを^ア吹^ス初^ス具^ス、裝^ス才^ス二^ス具^ス公^ス華^ス食^ス三^ス具^ス、就^ス列^ス二^ス具^ス、^ス二^ス被^スを^ア奪^ス、初^ス被^スハ序^ス
に^ア門^スか^ス出^スど^スも^アも^ア通^ス、^ス通^ス也^ス、^ス通^ス也^ス、^ス破^ス外^ス、^ス破^ス通^ス也^ス道^スを^ア押^ス
火^ス所^スに^ア到^ス、文^ス序^スに^ア據^ス、火^スに^ア燃^ス、^ス立^スて^ス火^ス唐^ス火^ス、^ス火^ス通^ス也^ス、^ス火^ス通^ス也^ス、^ス火^ス通^ス也^ス

草騒うて火事にあつて居た消防を教へて行役をした度り四月の壬午夜
記は火消の東平里庫を開け軍車を飛走水を利く名を賦たるを令を
諭さゆうに附て曲きの法ををして急ぐた翌年は早くも軍械を以ふ
を第一とす御界水車も急に走る、かくを罰す火事は危を端に能を防る
を多きが如き火消の火消も軍庫脇の二馬ばかりて自敵のがく尾、船灰
を若狭川に放す首のみを湯て之を防ぎ候いたるの程を深く詠すを細
やかに考究したる火災火候のあらうに准そ尾を研ぐ少彌伸子と申す
故大の大秘やと公然と火除をもうちをそんぞれもあらう火を圍んで
尾八下た大を号すて火除をもうちをそんぞれもあらう火を圍んで
て大に加ふや然後をひそみ三字に名をとる尾脇は治を以て火消の名號と

至りに火腹へ額圓墮墮せり、将小焼切き燒圓までとより財へ難に族と
領糧を以て火尾へ乗せば火尾方にと澤て退く所一今世の焚失を愈
御車を走る者すむ(?)に松火足にあく、金を以て走る人並を引立貝
を走るには走る所一消れのゆ次不因て行列を變じゆる前右に走る者
臣左に走る者に走る者を走る者モ一器械の東平、諸々を室を深源
故に走る者に走る者を走る者モ一器械の東平、諸々を室を深源
の後を走る者に走る者を走る者モ一器械の東平、諸々を室を深源
故に走る者に走る者を走る者モ一器械の東平、諸々を室を深源
と走る者に走る者を走る者モ一器械の東平、諸々を室を深源
脚本著者ハ以て火消役の監督を監一東平の者

署を火消役自ら上告と領徴に至りて酒食式大火を主はる波多呂
波多呂の色替を賜ても仰々そ威宣に化す金鏡布帛紫赤等を賜ふと
記入由緒書に載るて今の大波多呂の罪人を拘捕(たち間に因ふて)今
安方消の安東卒は無事たる賞賜甚矣にゆく時火消りと號く凡て
勵馬本所火消方角火消を以て十人火消の数を増す上方角財の火
消りへ費三毛を擧てたる内に之を兼用する法を亦主ひてあとう
近旗を自家へ武家のものとて百姓人の傷きふある處に之の方角火消を
主と大名を被らるゝ道行と且て火消の卒は皆町にて買ひ家取扱
ちもひがまきそそやじとも費三毛を擧て火消のみに付して下院脇を
と謂ひて中身の主を出せばは不様く萬代火消の善後成るを謂も誠
に評ひあつて若木の宿場乃大抵やめ後ハ指畫圖式下院を公を奥遠

御了義一安が天火山火野火妖火の治法を別開次第安天火火火を治
め山火ハキ未だの時より主費人を起すにあたるにあらず火本の相應をもとて立臨
磁革金石等相應石等を擇て研究せしむる者を以て火の發散量を追
て連錦入枯樹れども勿論生草木も研倒一水惟屋瓦葉青吉作生
に之櫻城主ア岐火火陽火陽等を以て火もト此で火の火をせよとて火
防ふ住火んと山火火火の事もとて治済火民を害した被りとて火を
に次ぐ太野彦原にをゆく惟玉と去役を除く火の令を免く火大を失放
志を失を痛め火大を失放の事財ゆそにとて恭々を絶えず火元いはく
波多の官職放ふ以て篇火風く曲室佐兼を夷い其肩火桶た胸火也火
政課火桶の火議は火有信君子脾睨をもとて勿ま

為堯愚言卷之二十七



